クニ入テ前ニ居ヌ、年來ノ事ヲ終夜談ジテ、曉ニ成テ仙人返リナムト云テ立ツニ、人氣ニ身重ク成テ、立ツ事ヲ不得ズ、然レバ仙人ノ云ク、香ノ烟ヲ近ク寄セ給ヘト、僧正然レバ香爐ヲ近ク指シ寄モツ、其ノ時ニ仙人、其ノ烟ニ乘テゾ空ニ昇ニケル、此ノ僧正ハ、世ヲ經テ香爐ニ火ヲ燒テ烟ヲ不斷ズシテゾ有ケル、此ノ仙人ハ西塔ニ住ケル時、此ノ僧正ノ弟子ニテナム有ケル、然レバ仙人返テ後、僧正極テ戀シク悲ビケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔古事談 二臣節〕定頼卿自禁省退出、不入内方、先誦法花經第八卷之時、四月月影朦朧、樹陰繁茂、小透長尺許物貌シタル聳樹上、不見何正體、成怖思止聲了、又小透アリツルヨリモサガリテ、庭樹ノ枝中ニ如初聳渡之後、即高欄之上、有如影之者、異香薰室、乍恐問云、彼ハ何、答曰、仙人陽勝ニ侍、自本山天台嶺、指金峯山飛渡之間、遙聞御音所參向也、不可令怖畏給云々、只恨不聞經云々、納言依此重誦經、仙感荷之餘言テ云、陽勝之侍所ニハ御坐哉云々、納言云、所庶幾也、但何樣ニシテ可至哉、仙云、可令乘陽勝背給云々、相互承諾畢、爰納言有可示置事トテ入内方、其時仙人心キタナクイマシケリトテ歸去畢云々、

〔元亨釋書 十八神仙〕釋窺仙、所謂喜撰法師也居宇治山、持密呪、兼求長生、辟穀服餌、一旦乘雲而去、

〔古今和歌集目錄 下〕基泉者、山背國乙訓郡人云々、宇治山記、作窺詮仙人也、髓腦稱桑門是也、或人云、彼住所宇治山奧深入有山、名溝尾、下人伐薪之山云々、近日堀出火坑云々、

〔無名抄 上〕喜撰が跡の事
又みむろどのおくに、二十餘町ばかり山中へ入て、うぢ山のきせんがすみけるあとあり、いへはなけれど、堂のいしずゑなど、さだかにあり、これらかならずたづねてみるべき事也、

〔金洞山緣記〕長清道士は、もと相州北條家の臣にて、其父も名ある勇士なりしが、關中擾亂の時、賊兵某の爲に殺されたり、道士其讐を復する事を得ず、遂に上野國金洞山に隱れ、人跡絶たる巖窟